



Title	芸術作品における道徳と美の関連性についての研究 [論文内容及び審査の要旨]
Author(s)	栗, 楨
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	甲第14562号
Issue Date	2021-03-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/81232
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/
Type	doctoral thesis
File Information	Zhen_Li_review.pdf, 審査の要旨



学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学）

氏名：栗 槇

審査委員	主査	教授	藏田 伸雄
	副査	准教授	村松 正隆
	副査	教授	谷古宇 尚
	副査	准教授	宮園 健吾

学位論文題名

芸術作品における道徳と美の関連性についての研究

・当該研究領域における本論文の研究成果

本論文は近年関心の高まりを見せる分析美学の手法を用い、さらに B. Williams による道徳と倫理との区別などの現代倫理学の研究成果を踏まえて、「芸術作品の芸術的価値とその作品の道徳的価値との間に関連性はあるのか」という問題について検討し、その問いに対して肯定的に答えたものである。

日本では分析美学に関する先行研究は少なく、また海外でも芸術作品の道徳的価値についての研究は必ずしも充分とは言えない。しかし本研究はそのような状況の中で独創的かつ明確な結論を導き出している。

本論文は B. Gaut らによる、関連する問題を扱った主要な先行研究について詳細な批判的検討を行い、各論者の主張を具体的な芸術作品との関連で的確に分析している。それによって、「反抗的な不道徳主義」と「芸術的表現手段としての不道徳」という論法を用いるならば、芸術作品の芸術的価値と道徳的価値との間に関連性があると主張できるという結論を導いている。近年の美学研究における芸術的価値と道徳的価値の連関に関する一連の議論では、自律主義、穏健な道徳主義、倫理主義といった立場があるが、本論文はそれぞれの立場の長所と限界とを簡潔にまとめた上で、それらについての比較分析を行っている。特に栗氏は芸術作品に表れている芸術的価値と道徳的態度との関連について多面的に検討し、これらの立場の問題点を明らかにしている。栗氏は特に既存の規範を批判する反抗的姿勢の価値を表現するトランスグレッシブ・アートに着目し、芸術作品に「不道徳」なものとして表れている「反抗」が作品の芸術的価値を高めているという形で「不道徳主義」を肯定的に評価する。これによって栗氏は作品の芸術的価値とそこに表れている道徳的価値との間に関連性が見いだされると結論する。

・学位授与に関する委員会の所見

芸術作品の中で表現されている美的価値と道徳的価値との間に関連はあるか、という問題についての関連する先行研究のサーベイから得られた、詳細かつ緻密な分析にもとづく本論文での主張には十分な説得力がある。「多様性と自由の精神をもつ芸術の本性」についての栗氏の指摘は、芸術と倫理との関連についてのより深い考察に結びつくだけでなく、今後のこの分野での研究に大きく貢献するであろう。

本論文の一部はすでに日本倫理学会、日本哲学会等で口頭発表されており、本論文の最も主要な部分である第五章は多少修正して英訳された上、厳しい審査をへてオクスフォード大学出版会から刊行されている哲学のトップジャーナルの一つである *The Philosophical Quarterly* に掲載されている。この事実は、本論文の内容が当該分野では世界で一流のレベルにあると認められたことを示している。

しかし、本論文に問題がないわけではない。本論文ではトランスグレッシブ・アートを題材として、芸術作品とそこに表れている道徳性との間に関連があることが示されている。しかし本論文では栗氏自身の最終的な立場である文脈主義について十分な検討がなされていない。また鍵となる概

念である「道徳」について十分な規定がなされておらず、「作品」「芸術」といった概念についても必ずしも十分に規定されてはいない。

さらに本論文全体に日本語添削の制度を利用して修正がなされてはいるものの、残念ながら日本語として改善の余地のある箇所も残っている。しかし栗氏が日本語、英語、中国語のそれぞれで論文を執筆し投稿してきたという本論文の成立過程を考慮するならば、これはある程度仕方がないことではある。

上記の道徳概念、作品と芸術に関する理解という問題点については口頭試問の際に栗氏による説明があり、審査委員会はその応答は十分なものであると判断した。またそれ以外の問題点についても栗氏からは十分な説明があった。これらの問題点は上で述べた本論文の成果に比べれば大きなことではなく、今後栗氏が自身の研究を進める中で解消していくものと思われる。

以上の審査結果に基づき、本論文審査委員会は全員一致で本論文は博士(文学)の学位を授与するにふさわしいと判断した。